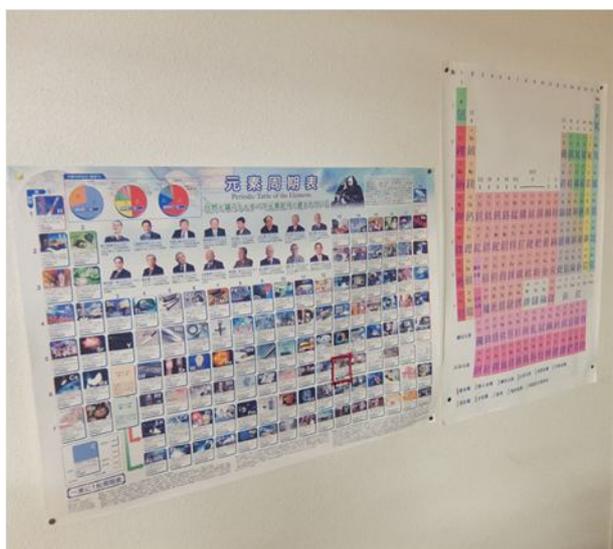


「ニホニウム」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

日本は長らく、自国で新元素の命名権を得られなかったが、ついにそれが実現した。113番元素の「ウンウントリウム Uut」である。これは、「観測できなかった時代」の仮の名称であり、ここに来て、日本の理化学研究所が確かな証拠を重ねて、命名権を獲得したのである。日本の科学史上、記念すべき快挙だと思う。



理科室の前の廊下には、大きく印刷した周期表を掲示してある。奥は中国語版の周期表だ。



私はさっそく、ウンウントリウムの場所を赤くマークし、新元素の候補名を書き込んでおいた。その名称は我が国の名を冠した「ニホニウム」。元素記号の候

補はNhである。「ポロニウム」「フランシウム」「アメリカシウム」などと肩を並べたわけだ。

ちょっと考えると、「ニッポニウム」のほうが良さそうに思える。しかしこの名称は、かつて43番元素(現在のテクネチウム)の名称候補になったことがあるので、規則で使えないのだ。当然「ジャポニウム」も候補になった。元素記号はJpで、国際的にはこちらのほうが受け入れられそうな気がする。他にも、「ワコニウム(和光市)」「ヤマトニウム(大和町)」「ニシナニウム(仁科博士)」「アマテラシウム(天照大神)」なども候補にあがっていたという。

しかし私は、やはり「ニホニウム」が一番良いと思う。我が国の正式名は「日本国」であるが、政府はこの読みを「にほんこく」でも「につぼんこく」でも良いとしている。日本人が自国の名称を「にほん」と呼ぶのだから、「ニホニウム」が一番美しい。



マークに気づいて、さっそく何人もの子どもが、「あ！ニホニウムだ！知ってるー。ニュースで言っていた！」「日本の名前が原子(正確には元素)についたんだよ！すごいよね！」といった会話をしていた。これは、誠に喜ばしい図であった。

観測されたのはわずか数原子で、寿命も数ミリ秒。化学的性質はアルミニウムに似ているかも知れないが、水酸化ニホニウム1gの価格は数百兆円だろう。理科学研の森田浩介博士は「実用性はない」と述べているが、それはちがう。「日本の未来の科学者たちに夢を与える」というすばらしい「実用性」がある。